

【シンポジウム】

これから 10 年のビジョン：

精神保健福祉医療領域の社会運動とリカバリーフォーラムの役割

～NPOコンボがめざす活動との関連から～

シンポジスト:「これから 10 年のビジョン」 磯田重行(地域活動支援センターぷらっと)
「これからの「家族による家族支援」を考える」 岡田久美子(さいたま市精神障害者もくせい家族会)
「根拠にもとづく実践プログラム(EBP)のこれから 10 年」 伊藤順一郎(国立精神・神経医療研究センター)
「アンチスティグマ活動のこれから」 高橋清久(財団法人精神・神経科学振興財団)
「NPOコンボのこれから 10 年ビジョンとリカバリーフォーラム」 大島巖(日本社会事業大学)
司会:後藤雅博(南浜病院)

日本の精神保健福祉は過去数十年にわたってさまざまな変化を遂げてきました。「理想」の姿にはいまだ遠いかもかもしれませんが、その歩みは着実なものでもあったのではないのでしょうか。

このシンポジウムでは、そういったこれまでの歩みに思いをはせつつも、これからの 10 年(近い将来)の展望について、5 人のシンポジストの方々からお話をうかがいました。

磯田重行さんは、当事者として、ピアスタッフとして、そして現在はサービス提供者として、福岡県をベースに精力的に活動を続けています。

ご自身の経験を含め、地域活動支援センターぷらっとで働くピアスタッフの方々が日常的に担っている役割(来所相談、来所できない方への訪問、WRAP クラス、報告書の作成、他機関との連絡調整、等々)を紹介していただきました。10 年前はめずらしかった「ピアスタッフ」が、現在全国で増えはじめ、確実に実績を積んでいる姿は、リカバリーを体現するものであり、また、ピアスタッフの活躍が、精神障害への意識をかえていくだろうという展望を持っているとも述べられました。生き生きと働くピアスタッフの姿が伝わってくるお話でした。

岡田久美子さんは、埼玉県さいたま市の家族会をベースに活動している方です。

ここ数年、「家族支援」ということが、ようやく精神保健医療福祉の分野で言われるようになってきましたが、「家族が当事者を支えるための支援」にまだ重点がおかれていると指摘されました。岡田さんの考える「家族支援」の主人公とは、まさに、家族自身なのだそうです。岡田さんがNPO法人コンボで5年にわたって関わっている「家族による家族支援 (Family to Family)プログラム」という心理教育プログラムは、まさに、精神疾患の課題を抱える当事者である家族を、同じ経験や悩み(そして、希望も)を共有する家族が支えることに重点がおかれているのだと述べられました。家族による家族支援もまた、仲間(ピア)が同じ仲間(ピア)を支える、ピアサポートのひとつの形だと思いました。「家族だってリカバリー！」という言葉が印象的でした。

伊藤順一郎さんは、ACT (Assertive Community Treatment : 包括型地域生活支援プログラム) や、IPS

(Individual Placement and Support : 個別職場定着とサポート)、家族心理教育など、EBP (Evidence-Based Practice : 科学的根拠に基づく実践)、すなわち、「役に立つ」ということが、研究等の科学的根拠によって裏付けられている支援プログラムについて話されました。

効果が具体的な項目ごとに数値化されているこういったプログラムは、信頼できるものではあるが万能ではなく、実践のさいの課題もあると指摘され、やり方によっては「似て非なるもの」になってしまったり、また、その国や地域の文化や風土、価値観に配慮し、工夫が必要であると述べられました。本来数字で測れない領域、1人ひとりの人生の「物語」に寄り添うことを忘れた時、EBP もその意義を半減してしまうという指摘はたいへん重く、EBP 普及のこれからの 10 年について、深く考えさせられました。

高橋清久さんは、「こころのバリアフリー」、そして「アンチスティグマ」活動に長年にわたって深く関わっている方です。

精神障害者を危険視し、社会から隔離することを良しとしてきた法律によってスティグマが社会的に肯定されてきた歴史について述べられ、そういった外からの偏見によって、当事者や家族も内なる偏見を抱いてしまうと指摘されました。一方、それに対するこれまでの動き、厚労省によるバリアフリー宣言や日本精神神経学会の呼称変更、さらには、昨今のさまざまな当事者活動についても紹介され、多くの当事者がリカバリーしているとも述べられました。これからの 10 年、学校教育やマスメディアの協力、接触体験の増加などを通じ、正しい知識を持つことによって、アンチスティグマは進んでいくであろうというお話には、同時に、決して後戻りさせてはいけないとの、断固とした決意がひしひしと感じられ、背筋が伸びるような思いがしました。

大島巖さんは、特に NPO 法人コンボの代表理事というお立場から、「リカバリー」を国民的支援目標にしていくことについて話され、その目標にむけて、リカバリー全国フォーラムが果たすべき役割、また、NPO 法人コンボができることについて、豊富なアイデアを提案されました。

フォーラム参加者 1 人ひとりが、「リカバリー」という理念を普及していくためのキャンペーンの担い手になること、またそのための方策を、フォーラムで検討していくことなどについての提案があり、やること・やれることはまだまだあるのだとの認識を新たにしました。これからの 10 年にむけ、期待と希望が持てるような、前向きなお話でした。

シンポジストの皆さんのお話のあと、座長の後藤雅博さんのもと、質疑応答が行われました。さまざまな意見や考え方、アイデアが参加者から出され、1 つひとつについて議論を深める時間が欲しいなあと感じました。今後の企画や方向性について示唆にとんだやりとりが多くなされました。

リカバリーフォーラムには、当事者、家族、福祉や医療の専門職、学生さんなど、さまざまな「立ち位置」の方が参加します。「これからの 10 年」を創っていくのは、まさに私たち 1 人ひとりであり、それぞれの場においてそれぞれの個人が主体的に変化をおこしていく・いけるのではないかという希望を感じたシンポジウムでした。

我が国の精神保健医療福祉が、そして、それにかかわる多くの人々が、よりよい未来を求めての歩みのプロセスのなかにあり、これはまさに、「リカバリーの旅路(journey)」そのものではないかという思いを強くしました。